英語の話法体と日本語の話法体

貞　方　敏　郎

英語の話法体の文章では，直接話法と間接話法には独自の語法上の特長があって明瞭に使い分けられる．日本語にも話法体の文章があり，英語の直接話法・間接話法に相当すると考えられるものが区別されるが，英語の場合と比べると，かなり不明瞭でありその語法上の規定も英語のように厳格なものではない．日英両語のもつ文法組織の大きな相違のひとつである．日本語は英語に比べ，主語の交替，時制の推移，疑文・感嘆文中の語順の変化，場面副詞の言い換え，といった規則があまり厳格でなく，そのうえに引用符のカッコの使用法もルーズであって，間接話法の被伝達部は，しばしば直接話法式に書かれてしまって，この両者の区別が判定し難い場合が多い．また主語を欠いて述語だけで文が成立することは極めて普通であって，これは日本語の話法体の性格を特長づける一原因でもある．

英語において，話法体の正式な文章は伝達節と被伝達節とを具えた文，即ち主節と従属節を含む一種の Complex Sentence であるとされ，直接話法または間接話法について，かなり厳格な規則が与えられており，定められた話法上の条件のどれかを欠いたものは奇形として「不完全形」または「混合形」と呼ばれて非文法的文と見なされる．これは，ひとつには英語では「主語＋述語」（NP＋VP）という文構造の基本形式が確立しており，これを基準としてこれに伴う種々文法上の Concord の規則があるためである．一方，日本語の文構造においては主語というものの影は極めて薄いものである．これは英語の文構造との相違の基本的特長を示すものであって，極端な言い方をすれば，英文法は主語述語の二本立て，日本文法は述語だけの一本立とい

うこともできる．特に会話体では日本語は，よほどの必要のない限りは主語を言い表すことは稀れである．次の日本文の英語訳を対照すればよく分るであろう．金田一春彦氏は，日英両語の性格の一相違を説明するのに，尾崎紅葉の「金色夜叉」の中から次の場面を例にとり，その英訳文と比較している．お宮と母親とのかなり長い会話の場面であるが，この会話では正式には主語ゼロと言ってよい．

（母）「まあ，お聞きよ．それは，ね……」

（宮）「おつかさん，可いわ．——私，可いの．」

（母）「可かないよ．」

（宮）「可かなくつても可いわ．」

（母）「あれ，まあ．……何だね．」

……

（母）「何もお前，泣くことは無いじやないか．可笑しな人だよ．だからお前の言ふことは解つているから，内へ帰つて，善く話した上で……．」（・印は金田一氏がつけたもの）

A．ロイド氏[1]はこのへんの会話を次のように英訳しているそうである．英語訳では全部主語が明示されている．

"My dear child, listen to me, I think ....."
"I don't want to listen to you. ..... I don't care for anything."
.....
"What foolishness this is. There is nothing to weep about. I will talk it over with you faster when I go home ....."

この英文はかなり原文に忠実のように見えるが，一面，原意のもつ感情の含みを伝えていないことも確かである．それというのもこのような日本語の情意的な会話のもつニュアンスは，命題型の構文形式を基調とする英語のような外国語にはとうてい移すべくもないことは当然である．前述したように，この個所は金田一春彦著「日本語」から拝借した例文であるが，ただし同氏

がこの個所を挙げたのは，この例によって，日本語には文の終りの「ね」「よ」「な」「わ」などの表意語句で主観的な情意を表わすのに対して，英語ではこうした意を表わす単語に欠けていることを指摘するためであった.[2] 事実，上例の英訳文の中には主観的な意味を特に表わす単語はひとつも用いられてはいない．しかし一方，私はこの例文によって，日本語の文に主語が欠けていること，またそのために述語の含みが言外の意味を深め，却って，せん細な心理の葛藤が巧みに表わされるという点により一層の注意を向けたい．日本語の「ね」「よ」「な」「わ」などの表意語に相当する英語の表現語句といえば I say, I think, I mean, I tell you, you see, you know など，主語＋述語動詞の形が挙げられるが，いずれも日本語のもつ感情的なニュアンスを表わしているとはどうしても思われない.

また「金色夜叉」中の熱海の海岸の有名な場面で，貫一が，心変りをしたお宮に向って，「奸婦，姦通女，おれが婿では不足なのだな」と罵るのに対して，お宮が「貫一さん，それじや余(あんま)りだわ……」というところがある．このセリフは，それまでの50頁ばかりの間に3回出てくる.

「実はおじさんやおばさんの了簡(りようけん)は如何(どう)でも可(い)い，宮さんの心一つなのだ.」「私の心は極つているは.」「そうか知らん？」「然うか知らんなんて，それじや余(あんま)りだわ.」

……

「始めから富山と出会う手筈になつていたのだ．或は一所(いつしよ)に来たのかも知れない．宮さん，お前は奸婦だよ，姦通したも同じだよ.」「そんなひどいこと，貫一さん，余りだわ，余りだわ.」

この三例とも，あんまりどうであるのかは省略されている．金田一氏は，これが日本的であると言って，再び A. ロイド氏の英語ではこのセリフが "How *cruel* you are, Kwanichi!" となっていることを指摘して日英語の違いを比較している.[3]

また川端康成氏の「水月」という小説中，手鏡をもったある男女の会話で，

「不器用だね．どれ僕が持ってやる．」

というセリフがあるが，これを斎藤襄治氏は，“How clumsy you are! Here, let me hold it.” と訳している[4]．どうも英語ではこのような言い回し以外には適訳がないらしい．

いずれにしても英語の文は主語＋述語の型を崩すことは比較的に稀れである．このように「主語＋述語」の型を保つ英語の文は，論理的で「命題型」であるといえる．フランス語文法で，Sentence の小型‘Clause’を‘Proposition’と呼ぶのも頷けることである．この点，日本語の情意的「陳述型」の文とは対照的である．英語の文章では，従って，話法の転換の際には一群の守るべき規則が複雑となり，話法‘Narration’として一応文法の対象項目ともなり得る．事実，多くの学校文法では Person, Number, Case, Tense 等の文法範疇と並んで英文法の中でも重要な一項目となっていることが多い．

一方日本語の話法体では，直接話法を合図する引用符のカッコが作家の好みや筆癖や，或は筆勢によって，いとも無雑作に省略されるし，伝達節と被伝達節をつなぐ接続の格助詞を無視する傾向が見られる．この現象はある程度は英語にも見られ，間接話法の場合 I say, I think などの動詞の後には Complementizer としての *that* が省略されることが特に多い．日本語では直接話法の場合に，これに相当する「と言った」の「と」が省略されるが，英語の *that* の場合と比べてその頻度は日本語では遙かに高い．英語もこの種伝達動詞の例を調べると接続詞なしのパーセンテージは異常に高く，その方が正用であるかの観がある．

He said he would go to Shylock, the money-lender, and borrow the money. —Lamb, *Tales from Shakespeare.*

She thought her mother looked wonderful with her back to the leafy window. —Mansfield, *Prelude.*

..... he said it would rain; they said it would be a positive tornadoe. —Woolf, *To the Lighthouse.*

また Woolf の文章中 *think* の伝達文は殆んどが文中の嵌め込み文か，文尾に置かれた afterthought の形をとり，描出話法への接近を感じさせる．

> So she said nothing, but looked doggedly and sadly at the shore, ... as if the people there had fallen asleep, *she thought*; were free like smoke, were free to come and go like ghosts. They have no suffering there, *she thought*. —*To the Lighthouse*.
>
> There was always something cold in Clarissa, *he thought*. —*Mrs. Darroway*.
>
> There they are! *he thought*. Do what you like with them Clarissa! —*Ibid*.

次の日本語の会話も接続詞ゼロである．

> 「あら」透子は言った．「お帰り」淙一が言うと，「お邪魔しています」了介も言った．（中略）「おなかが空かなかった！」透子が言うと，「僕たち先きに食べた」淙一が言ったので，「何もなかったでしょう」了介の方に訊くと，「いいえ，おいしかった！　御馳走になりました」了介は答えた．
>
> ——井上　靖「城砦」

この会話にはセリフにひとつひとつ伝達節が丹念につけられてあるが，「と言った」というべきところに接続の格助詞「と」が総て省略されている．しかしこれが相互話法になると，英語のように手放しの省略は許されない．一，二の例を挙げれば「(その客は)まだここへ帰って来ていないか訊ねてみた．」（横光利一「紋章」）「ママのこの着物，似合うか似合わないか，皆なに聞いてごらん」（丹羽文雄「顔」）など．第一の文は下線の部分に引用符カッコがあったのが省略されたと見て，「と訊ねてみた」とし，第二の文も下線の部分をカッコで囲み，「と聞いてごらん」とすると明かに直接話法となる．このように日本語の両話法形式の間には極めて微妙な相違しかないようだ．（後出）．句読法（Punctuation）の用法が野放し状態であった古文などになると，特に話法の実態を捉えるのに困難を生じて，時には学者間にも論

争を起すことがあるそうである．再び金田一氏の用例を借りてその実態を見てみよう．「平家物語」の「競（きおう）」という章から採られたものである．競というのは，平宗盛の部下に，いつわって住みこんだ源氏方の渡辺競という武士の名で宗盛の気に入りの侍となりすましていたものである．ある日，出火の折りのことである．

> 宗盛の卿急ぎ出でて，競はあるか候わずと申す．すはきやつめを手延び（＝ておくれになる）にしてたばかれぬるは．あれ追つかけて討てと宣へども……

同氏は「ちょっとこの文章を読むと，宗盛の卿が急ぎ出て，『競はあるか，候はず』と言ったかのように取れる．が，実はそうではない．現代だったら『競はあるか』『候はず』と書くところである．つまり『競はあるか』だけが宗盛のことばで，『候はず』はそこにはっきり書かれていない郎党たちのことばである．で，次の『すはきやつめを……』から『追つかけて討て』までが，再び宗盛のことばになる．が，ここも『宣へども』まで読んではじめてそれが明らかになるので，『宣へども』が出て来ないうちは，ただ宗盛の心理を描写しているのかな，とも取れる[5]」と説明している．この一節は，富倉徳太郎氏の校註の流布本では，

> （六波羅には競が屋形より出火で来りとてひしめけり．）宗盛卿急ぎ出でて，「競はあるか」と尋ねらるれば「候はず」と申す．「すは，奴（きやつ）めを手延べにして，謀られぬるは．あれ追つかけて討て，者ども」と宣へども……

とある[6]．会話の部分をそれぞれカッコで囲み，その間に「と尋ねらるれば」を入れるなどして読み易くしてあるのだが，火急の会話としては原文にある「競はあるか候はず……」と読んだ方がこの場の緊迫感をよく表わして効果的である．英語にはこのような話法形式は恐らく無いであろう．

また日本文法大辞典でも，同じく「平家物語」卒塔場流の章の一文を話法の混合形の一例として挙げている．

宮人答けるは，「是はよな，婆竭羅龍王の第三の姫宮，胎蔵界の垂跡也．此嶋に御影向ありし初めより済度利生の今に至るまで，甚深の奇特の事共をぞかたりける．[7]

この文は始め直接話法的な叙述で始まっていながら文の途中でいつの間にか間接話法的な口調に変っている．この文中に引用符を入れるとしても，前例の「競」のときのようにうまくいかない．「是はよな……の始りの所にはつけられるが，結びのカッコはどこにもつけ難い．富倉氏の註本では，「是はよな竜王の第三の姫宮，胎蔵界の垂跡也」の所でカッコが閉じてある．[8] そしてその後の部分は間接話法で続いている．だが，どうも正当な話法体の用法として頷き難い文章である．また他の例でこれとは逆に間接話法的な言い方で始まって中途で直接話法的に転じることも間々あることである．金田一氏は近代の例として，漱石の「坊つちやん」の一節を挙げている．坊っちゃんが赤シャツに誘われて釣に出るところである．

君釣に行きませんかと赤シャツがおれに聞いた．（中略）おれはさうですなあと少し進まない返事をしたら，君釣をしたことがありますかと失敬なことを聞く．（筆者注，この三つの文は敬語体をとっているから引用符がなくても直接話法式と見られる．会話のセリフの部分にカッコをいれると完全明瞭な直接話法形である．）あんまりないが，子供の時，小梅の釣堀で鮒を三匹釣つたことがある．夫から神楽坂の縁日で鮒を針で引つかけて，しめたと思つたら，ぽちゃりと落して仕舞つたが，是は今考へても惜しいと云つたら，赤シャツは顎を前の方へ突き出してホヽヽヽと笑つた．

この文中，坊っちゃんのことばとしてカッコをいれるとすれば，「あんまりないが……今考えても惜しい」までである．なぜならその後に「と云つたら」という伝達節があるからである．しかしまた「あんまりないが，子供の時，小梅の釣堀で鮒を三匹釣つたことがある．」の文は一応終止句読点で結んである．で，この部分は坊っちゃんの口に出して言ったセリフではなく心

中の動きを表わしたもの即ち描出話法ではないかとうっかり考えるかも知れない．がその次に「夫から」という接続の句があるのでこの二つの文は続いたセリフである．カッコの有無により，間接・直接どちらの話法ともとれる文である．毛利八十太郎氏の英訳では「あんまりないが」以下は坊っちゃんのことばとして間接話法体で次のように訳されているそうである．

> I told him not much that I once caught three gibels when I was a boy .....

一方 Tuttle 社の日本文学英訳選集の佐々木氏の訳も同じであるがこれは直接話法となっている．

> "Yes, but not often." said I. "When a boy, I had the pleasure of catching three *funa* in the fishing pond at Komme. ..... I still remember it with great regret."[9]

金田一氏は，「こういう点，日本語の文は実に不明確である．もっともこのところは書き手としては，読み手がこれを坊っちゃんの心のうちととって読んで行っても，かまわぬつもりだろう．文学作品ではそういう風に書くこともおもしろい．がこれも，文章の正道ではあるまい」と否定的な意見を述べている[10]．たしかに今まで見てきたような例文を見ると，日本語の「話法」は文法的に取りつくシマがないといった程に乱れているようだ．しかし英語の文章でも時々これに類した形が発見される．つまり伝達節が文のどこまでを覆うのか，伝達節の射程がどこまで及んでいるのかが判然としない場合である．次の文は Gissing の小説中で，父娘が汽車の中で交す会話の一部である．

> The train stopped. The commercial traveller alighted. Rose, leaning toward her father, whispered that she was thirsty; would he get her a glass of milk or lemonade? —Gissing, *The Scrupulous Father*.

"Rose ..... whispered" の被伝達文，即ちローズ自身のセリフは "that she was thirsty" までなのか，それとも "would he get her a glass of milk or lemonade?" までの全部なのだろうか．would he .....? の部は間接話法としては崩れた形で混合形をとっている．また前の文と後の文の間にはセミコロンがある．文型としては前例「坊っちゃん」の文と似ている．従ってこの文は，「ローズは父に'私のどが渇いたわ，ミルクかサイダー買って下さらない'とささやいた」と解するのが常道のようだが，"would he get her ....." の文をローズの心の動きを写した一種の描出話法ととって，「ローズは父に'私のどが渇いたわ'とささやいた．でもお父さまミルクかサイダー買って下さるかしら」との意味にもとれぬことはない．しかし文脈全体からの印象では，やはり *that* 以下終りまで全部をローズのセリフととる方が自然であろう．だがそこには幾分の曖昧感が残ること，坊っちゃんの場合とあまり変りはないようだ．しかし日本語のこうした語法上の寛大さというか自由さというか，或はルーズな点が話法体の用法に柔軟性を与え，後に述べるように，いわゆる描出話法の形をごく自然に導入し，その種の文体的技巧を極度にまで発展させてきたように思われる．

日本語の直接話法と間接話法は語法上かなりの接近があることは事実である．それでも，英語ほどでないが，その両話法間には幾分かの違和感がある．しかしそれも更によく検討してみると日本語のこの両者間の形式の間には紙ひとえといった極めて微妙な相違しかないことが分る．形の上でそれと一見して分る特長は引用符の有無だけである．即ち間接話法の被伝達部であるセリフを囲むか，逆に直接話法の被伝達部からカッコを取り去るかすれば簡単に話法の転換ができる場合も多い．従って直接，間接いずれとも判定ができない文も間々生じる．ただ敬語的な文句，表意語句，自己尊大語句，地方地方の方言の使用，例えば東北弁，関西弁などがある場合等はそれによって察知しなければならない．ただし人称の転換を必要とする場合はカッコ文であるなしにかかわらず大体英語と同様の規則が一応は守られる．しかし実際に

はこうした細かな規則は必ずしも守られてはおらず，ふたつの話法が微妙な差異をもったまま同一文中に並列していることはよくある．この点では英語の話法転換には面倒な文法上の手続きがまだ多く，そう簡単にはいかないが，規範的な学校文法が教える規則が常に守られていることはむしろ少ないと言ってもよい．日本語では話法の区別がそれ程はっきりと確立していないので，規則に従わない破格文もそれ程問題にされないところ，英語では話法の区別には Purist の間では，かなり厳格なものがあり，規則に僅かでも反した形は直ちに 'Incomplete Narration', 'Hybrid from' と呼ばれ，現実に使用されていながらも「非文法的」として指摘される．

英語の話法転換で，まず煩雑なことは，文の種類が変化するごとに，いちいちそれに応じた伝達動詞を選択使用せねばならないことであろう．体験話法（＝描出話法）の有名な論文 *Die erlebte Rede im Englischen* で知られる F. Karpf はひとつの例を挙げてこの点を強調している．原文はドイツ語文であるが英語も全く同じである．

> "Ich habe nun noch einmal Deine Schulden bezahlt. Aber glaubst Du, das wird ewig so weitergehen? So ein Leichtsinn! Nun sei endlich einmal vernünftig!" (I have yet once more paid your debts. But do you think that it will go on without end? What a levity! Now be reasonable once for last time!)

この文を文法規則に従って忠実に間接話法に転換するとすれば4種の伝達動詞，er sagt (he said), er fragte (he questioned), er rief aus (he cried out), er bat ihn (he asked him) を必用とするであろうし，また転換されたとしても当然文章が冗漫無味（schlippend）となり，個々の文間の関係が遊離（freilich）してしまうであろう，特に2番目の aber (but) の文など然りであると言う[11]．更にこれに加えて，叙述文，疑問文，命令文，感嘆文が伝達される場合，間接話法の被伝達部内の変化の規則は実際の会話では勿論，書かれた文章中においても画然と守れないのが実情である．Jespersen もこ

の点を特に指摘して，"Human forgetfulness or incapacity to keep up for a long time the changed attitude of mind implied in indirect discourse causes the frequent phenomenon that a reported speech begins indirectly and is then suddenly continued in the direct form." と言って，ギリシア語，フランス語，アイスランド語の実際例やまたドイツ語，デンマーク語の間接話法の特殊な表わし方を挙げている[12]．近代英語の例としては Tennyson から，"She thought that peradventure he would fight for me."（多分彼は自分のために戦かってくれることだろうと思った．me=her）．また Dickens から "She sat sobbing and murmuring behind it, *that*, if I was uneasy, *why* had I ever married?"（彼女はそのうしろに坐って泣きながらつぶやいた，「不安だったら，どうして結婚なんかしたの？」(I<you)を挙げているが，Dickens のこの文は奇形中でも興味ある例で，伝達される疑問文は，伝達節と描出話法の合の子のような性格となっている．Jespersen 自身はこれを Represented Indirect Discourse（描出間接話法）と呼んでいる[13]．こうした奇形は従属疑問文に多く，被伝達節を合図する *if* や *whether* を用いず，直接話法式に，語順転倒をそのまま用いることがしばしばある．同じく Jespersen は Dickens から次の例を示している．

> He said (to me) was I coming back, and I said yes; and he said did I know you, and I said yes; and he said if that was the case, would I say to you what I have said, and as soon as I ever saw you, would I ask you to step round the corner.

そしてこの傾向は英語では益々増えつつあると言う[14]．このような Dickens の文は特に Jocular Style として書かれたものであろう．これ程に極端でなくとも，次のような話法の混合は口語体ではごく普通に用いられる．

> "I roused him, and asked if all was safe? — Where were the rioters? (=where the rioters were) — Mulock.

また "I ask you who are you."（=who you are）や "He asked me what

was the matter." などは定着した形として "It's *me*." などとともに正しい文として通用している.

要するに日本語の話法体は non-grammatical に近いと言える程の自由さがあり，この故に却って表現力に自由さと豊かさがあると言えるのではないだろうか.

あ と が き

故グラント教授とは，終戦直後のご来任以来30年近いお付合いだった．英文法の本を書く時，教材を作る時，論文を書く時，私の愚問に対して終始親切なご教授をいただいたものだった．先生は来日後，あまり日本語は話そうとされなかったが晩年の数年間急速に日本語が達者になられわれわれを驚かされた．私が教務主任だった頃，時々廊下で会うと「ハロー，ボス！　コーヒを飲まないか」とご自分の部屋に招じてご馳走して下さった．その折よく英語と日本語の相違点について話したが，お互いに native speaker の立場で話し合うので（その上に私のタドタドしい正則英語？のために）微妙な点に触れることができず，結局英語が logical language であるのに対して日本語は mood-language であるというようなことで話は終っていた．その後岩波新書の金田一春彦氏著「日本語」を読んで，この本が言語学という堅苦しい殻を破り，ウィットに溢れた軽妙な文章の中に要領よく日本語の特性が述べてあるのを知って，これは惜しいことをした，この小冊子をグラント先生に「伝授」したらよかったのにと今になって考えている．こんなわけで私のこの小論は同氏の著書から随時に援用させてもらった個所が多く，論文とも雑記ともつかぬかっこうとなってしまって，グラント教授に申し訳なく思う次第である．なおこの小稿の更に詳細については「同志社大学英語英文学研究」第11号（1975）に所載の拙稿「話法体の発達について」を参照していただければ幸いである.

注

1　Arthur Lloyd (1832–1911). 英国の宣教師・語学教師．生涯の大半を日本で過し，日本文学の飜訳紹介に尽した．特に「金色夜叉」の英訳は *The Gold Demon* の題名で1905年，東京，有楽社から初出版された彼の代表訳である．平易な

英語で適当に原文を調整しながら解りよく飜訳してあり，内容は十分に伝えているといわれる．

2 金田一春彦「日本語」(東京：岩波書店，1965)，pp. 181–2.

3 *Ibid.*, p. 219.

4 「現代日本英訳選集〈1〉」(東京：原書房，1968)，p. 164.

5 金田一春彦，*op. cit.*, pp. 205–6.

6 「日本古典全集・平家物語 上」(東京：朝日新聞社，1957)，p. 277.

7 「日本文法大辞典」(東京：明治書院，1972年版)，『話法』の項.

8 「日本古典全集」(前出)，p. 182.

9 Sasaki, Umeji, tr. by. *Botchan*, (Tokyo : Charles E. Tuttle, 1968), pp. 66–7.

10 金田一春彦，*op. cit.*, pp. 206–7.

11 Karpf, Fritz, *Die erlebte Rede im Englischen*, (Anglia, Bd, 42, 1933), p. 227.

12 Jespersen, Otto, *The Philosophy of Grammar*, (London, G. Allen, 1958), pp. 298–9.

13 *Ibid.*, p. 299, f. n.

14 *Ibid.*, p. 298.